

○平井康丸
(九大院農)

I はじめに

アメリカの農業のイメージとして真っ先に思い浮かべるのはなんだろうか？やはり畑が大きい、機械が大きい等の「大きい」イメージだろうか？もしくは、最近よく話題になる遺伝子組み換え作物から来る「本当に安全なのか？」という負のイメージだろうか？私は、2004~2006年の二年間、カンザス州立大学にポスドクとして在籍する傍ら、暇な時間を見つけて、東西南北へ車を走らせ様々な農家や農地を訪れた。それらの地で私が見て、体験し、感じたことを紹介させて頂く。

II カンザス編

カンザスはアメリカのど真ん中、多くの人が中学生の地理の時間でグレートプレーリとして学んだ牛の放牧、穀物生産が盛んな地域である。主な生産物としては、麦、大豆、ソルガム（マイロ）、コーンがあり、この地域は年間降水量が600mmと少ないこともあって、近年、大豆、ソルガムの生産が増えている（コーンは水を大量に使う）。

私が通うカンザス州立大学は、カンザス国際空港から西に車で二時間の位置にあり、そこからさらに南西に車で四時間走ると、私の受け入れ教官 Mark Schrock 氏の農場がある。Mark は、大学の業務 50%、農業 50%の兼業農家であり、秋の農繁期には殆ど大学にはいない。これが結構厄介で、論文修正や推薦書作成の度に、農場にコンピュータとプリンタを持って訪れ、農業を手伝う傍ら、それらを行った。

Mark 氏が所有するほ場の総面積は 2500 エーカー（1000ha）であり、1mile²（640 エーカー≒260ha）のほ場を基本（1 セクション）として、ハーフセクション（320 エーカー）、クォーターセクション（160 エーカー）という呼び方をしていた。私は良く妻と彼の農場の周りを散歩したのだが、1mile²（2.56km²）を一周歩くのに二時間くらい費やした記憶がある。また、この地は、自然も豊かで、鹿などの野生生物を良く見

かけた。

Mark 氏は、耕耘による土壌浸食防止の対策から、8年ほど前から、不耕起栽培を試験的に小規模から始め、現在全てのほ場を不耕起栽培に移行している。不耕起では除草が一番の問題であり、大豆に関しては、ラウンドアップレディの遺伝子組み換え品種を栽培していた。Mark によると米国では 80%程度大豆が遺伝子組み換え品種とのことだ。

III アーカンソー編

アーカンソーは、カンザスから車で南東に 11 時間、安いモーターに泊まりつつ農地を訪れた。農業は日があるうちが勝負、したがって取材も昼間が勝負。車での長距離移動が多いこの地で、運転しながら食べられるハンバーガが普及したのもうなずける。

アーカンソー州は、ミシシッピー川、アーカンソー川流域における米生産が盛んな地域である。今回の取材の目的は、Shelborn Reynolds 社製のストリッパーヘッダーを見に行くことだった。ストリッパーヘッダーはリールタイプヘッダと異なり、穀粒のみを櫛取るため、低動力で収穫速度が非常に速い（リールヘッダタイプの 2~3 倍程度）。1990 年代に開発され、現在では、アーカンソー州等の稲の生産地に広く普及している。

IV イリノイ・フロリダ・アリゾナ等

ポスター前で紹介予定。

IV まとめ

農業の現場に身を置いて、自分の専門分野だけでなく、地域の生産環境、バックグラウンド等、生産システム全体を勉強することが必要でないかと深く感じた。この貴重な経験は、日本学術振興会海外特別研究員制度に支えられたものである。ここに記して感謝の意を表す。